

外的存在、傾向、信念 外的存在に関するヒュームの議論

著者	大鹿 勝之
著者別名	OHSHIKA Katsuyuki
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	56
ページ	81-93
発行年	2020-03
URL	http://doi.org/10.34428/00011691

外的存在、傾向、信念 —外的存在に関するヒュームの議論—

文学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学
大鹿 勝之

要約

知覚する、しないにかかわらず存在するとされる、知覚とは別個の存在、外的存在について、その存在をどのように信じるようになるのかをヒュームは以下のように議論する。部屋にある家具を見、目を閉じた後に再び目を開けて見る時、家具は、類似しているため同一の家具と想像されるにしても、知覚の中断はこれらの類似する知覚を異なるものとみなさせる。そこでこの事物の同一性をもたらすのがこのように類似した事物を同一とする傾向である。またこのように類似した事物は中断した知覚を連続的存在によって結合する傾向をも与える。それは、知覚の同一性を正当化して、それらの知覚の中断によって必然的に巻き込まれるとされる矛盾を避けるためだとされる。また、その傾向について、感覚的な対象の連続的な存在を虚構する傾向が指摘される。この傾向は、記憶の生氣ある印象から生じるので、その虚構に生氣を与える。言い換えれば、物体の連続した存在に信念がもたらされる。

キーワード 外的存在、ヒューム、知覚の中断、傾向、信念

目次 1. 外的存在に関するヒュームの議論 2. 感覚と、連続した存在・知覚とは別個の存在 3. 理性と、連続した存在・知覚とは別個の存在 4. 整合性からの連続した存在の推論 5. 恒常性と個体化の原理 6. 知覚の類似性と同一性、傾向、信念 7. ヒュームの議論における傾向の位置づけ

1. 外的存在に関するヒュームの議論

この論文は、知覚する、しないにかかわらず存在するとされる、知覚とは区別された存在、外的存在についてのヒュームの議論を追っていき、議論に見られる傾向 (propensity) と信念 (belief) について検討する。

ヒュームは、『人間本性論』*A Treatise of Human Nature* 第1巻・第4部・第2節「感覚に関する懐疑論について」*Of skepticism with regard to the senses* において、研究の主題を

「どのような原因が物体の存在を信じるようにさせるのかという問題」、物体の存在を信じるように導く諸原因に関わるものとし、この題目に関する論考 (reasoning) を、以下のように問題を区別して始める (Hume [1739-1740/2007 :125-126])。

なぜ諸対象に、それらが感覚に現前していないときでさえ、連続した存在を帰するのか。

なぜ諸対象が精神 (mind) や知覚とは別個の存在を持つものと想定するのか。(この題目のもとに、ヒュームは諸対象の状況と関係、諸対象の存在と作用の外的な位置と独立性を含ませている。)

物体の連続的存在と、精神や知覚とは別個の存在のこれら二つの問題はともに密接に結びついているという。というのは、感覚 (senses) の対象が知覚されない時にも連続して存在し続けるとすれば、対象の存在は知覚より別個であり、また逆に対象の存在が知覚より独立・別個であれば、対象はたとえ知覚されずとも存在するに違いないからである。しかし、一方の問題の解決が他方の問題を解決するとはいえ、解決が生じる場所の人間本性の原理を容易に発見するために、この区別を保持し、連続した存在もしくは別個の存在の見解を産出するのは、感覚であるのか、理性 (reason) であるのか、それとも想像 (imagination) であるのかを検討しようとする (*ibid.*:126)。

2. 感覚と、連続した存在・知覚とは別個の存在

以上の問題について、感覚は、諸対象が感覚にもはや現れない後にもそれら諸対象の連続した存在の考えを生じさせることはできないとされる。そのようなことは、用語における矛盾であり、感覚が一切の種類的作用を止めた後でも、作用し続けることを想定する。また、感覚は、感覚の印象を、何かしら別個の、独立した、外的なものの像として提示することがないのは明瞭であるという。感覚は単一の知覚しか伝えず、それを超えた何ものかを示唆することは決してない。単一の知覚は、理性か想像の何らかの推論によるのでなければ、二重の存在の観念を産み出すことができない (*ibid.*:126)。ここでいう二重の存在とは、知覚された存在と知覚とは別個の存在のことである。

そして、ヒュームは、感覚が、知覚を別個なものとして、外的で、独立したものとして表すのかどうかを吟味する (*ibid.*:127)。そこで、外的存在の問題について、いくつかの印象 (impression) は身体の外にあるように見えるので、それらの印象を外的であると想定する場合をあげる。今字を書いている紙は、手の向こうにある。テーブルは紙の向こうにある。部屋の壁はテーブルの向こうにある。窓のほうに目を向けると、部屋の向こうに、大きく広がる野原や建物を知覚する。これらすべてのことから、物体の外的存在を確信させるためには感覚以外の何ものも要求されない、と推論されるかもしれないということについて、その推論を妨げるものを三つ検討する。第一に、手足や身体部分を眺めるときに知覚するのは身体ではなくて印象であり、それらの印象に現実の物的な存在を帰することは、現在問題に

している問題と同程度に、説明することがむつかしい問題である。第二に、音や味や香りは、普通精神によって連続して独立に存在する性質とみなされるが、延長において存在をもつようには見えず、身体に外的に位置するものとして感覚に現れることはあり得ない。第三に、視覚でさえ、距離すなわち外在性を、直接に何らの論考や経験なしに伝えることはない (*ibid.*: 127-128)。

ここでいわれている印象について、精神の一切の知覚は印象と観念 (*idea*) に区分され、両者の相違は、精神を打って思惟と意識に入り込むときに伴う活力と生气にあるとされる。印象とは、はじめて精神に出現した感覚といったような精神が感じるものであり、きわめて勢いよく激しく入ってくる知覚であり、観念は思惟ないし論考における印象のかすかな像とされる (*ibid.*:7)。

以上のように、感覚は実際にはたらいっている範囲を超えてはたらきえないが故に連続した存在の考えを与えることができない。感覚は、別個の存在を表象されたものとしても、元のものとしても提示しないため、別個の存在の見解を生み出さない。別個の存在を表象されたものとして現れるようにするためには、感覚は対象と像の双方を示されなければならない。別個の存在を元のものとして提示するためには、ある虚偽を伝えなければならない、その虚偽は、関係と状況になければならない (*ibid.*: 128)。

3. 理性と、連続した存在・知覚とは別個の存在

ヒュームは、音や色という事例において、別個で連続した存在を諸対象に帰するのは、理性に一度も相談することなく、ないしは何らの哲学的原理によってでもないことを指摘する。精神から独立した諸対象の信念を確立するために、どのような説得力のある議論を哲学者たちが産出できると夢想しうるとしても、それらの議論はほとんどの者には知られていないこと、子ども、農民、大部分の人類がある印象に対象を帰し、他の印象に対象を否定するように導かれるのは、そうした議論ではなく、一般大衆がこの問題について引き出す結論が、哲学によって確証される結論と正反対であるのが見られるという。哲学は、精神に現れるあらゆるものは、知覚以外の何ものでもなく、中断していて、精神に依存していることを告げるが、しかるに一般大衆は、知覚と対象とを混同し、感じ、見るものそのものに別個の連続した存在を帰す。このことはまったく理性に適っていないから、知性以外の他の能力から発しなければならない。これに付け加えて、知覚と対象を同じと見なす限り、一方の存在から他方の存在を推論したり、経験的事実 (*matter of fact*) について確信させうる唯一のものである、原因と結果の関係から議論を形成したりすることはけっしてできない。知覚を対象から区別した後でさえ、なおも一方の存在から他方の存在を論考することができない。理性は、どのような想定に基づいても、物体の連続した別個の存在の確信を与えはしない。この見解は、まったく想像によるほかなく、このことが主題とならなければならない (*ibid.*:129)。

4. 整合性からの連続した存在の推論

ヒュームは、すべての印象は内的で消滅する存在であり、そのようなものとして現れるので、印象の別個で連続的存在の考えは、印象のある性質と想像の性質との共同から生じるに違いないといい、この考えは印象のすべてに及んではないので、ある印象に固有の性質から生じるに違いない、という。そこで、別個で連続した存在を帰する印象と、内的で消滅すると見なす印象との比較によって、これらの諸性質を発見しようとする (*ibid.*:129)。

少しばかりの吟味の後、連続した存在を帰するような対象はすべて、存在が知覚に依存する印象と区別する、特有の恒常性 (constancy) をもっていることが見いだされる。目の前にある山々や、家々や、馬たちや木々は、常に同じ秩序で現れてきたのであり、目を閉じるか頭の向きを変えるかしてそれらを見失っても、すぐ後に少しの変化もなくそれらが戻ってくるのを見いだす。ベッドやテーブル、本や紙は、同じような仕方で現れていて、それらを見たり知覚したりするのを中断するという理由で変化することはない。このことは、その対象が外的な存在をもつと考えられているすべての印象について成り立つが、その他のどの印象についても、それが穏やかなものであれ、激しいものであれ、随意的なものであれ、不随意的なものであれ、成り立たない (*ibid.*:130)。

しかしながら、この恒常性は、きわめて重大な例外を認めないほど完全ではない。物体はしばしばそれらの位置や性質を変え、少しばかりの不在や中断の後ほとんど知ることができなくなる。しかし、こうした変化にあってもそれらの物体は整合性 (coherence) を保持していて、互いに通常の依存性をもっているので、このことが因果性からの一種の論考の基礎となり、物体の連続的存在の見解を生じることが観察できる。1時間の不在の後に部屋に戻ってくると、暖炉の火が部屋から離れたときとは同じ状態にはないことがわかる。しかし、他の諸事例において、いようとまいと、近づいていようと離れていようと、同じような時間に同じような変化を見ることに慣れている。それゆえ、恒常性と同様、物体の変化における整合性が、外的の対象の性質の一つである (*ibid.*:130)。

ヒュームは、整合性が物体の連続的存在の見解を生じるかを検討し、次のような事例を挙げる。部屋の中で坐り暖炉の火に向かっている。感覚を打つすべての対象は、周囲数ヤード内に含まれている。記憶は多くの対象の存在を告げるが、この情報はそれら諸対象の過去の経験を超えて広がることはなく、感覚ないし記憶はそれら諸対象の連続性の証拠を与えない。このように坐って、思考を巡らせているとき、突然ドアが蝶番のところで回る音がするのを聞き、少しばかり後に運搬人が近づいてくるのを見る。このことは多くの新たな反省と推論の機会を与える。第一に、これまでにこの音がドアの運動以外のものから出るのを決した観察したことがなく、部屋の反対側にあったと記憶しているドアがまだ存続しているのでなければ現在の現象は一切の過去の経験と矛盾すると結論する。さらに、人間の身体は重力と呼ぶ性質を持っていて、体が空中を上ることを妨げる性質を常に見いだしてきたが、記憶して

いた階段が不在時に消滅していないということがなければ、運搬人は部屋に到着するために空中を上らなければならなかったことだろう。しかしそれだけではない。運搬人から手紙を受け取り、それを開けてみると、筆跡と署名からその手紙が200リーグ（約600マイル）離れていると述べている友人から来たものであることがわかる。明らかに、記憶と観察に従って、海や大陸の全体を精神のうちに繰り広げ、駅馬車や連絡船の影響と連続した存在を想定するのでなければ、この現象を他の事例における経験に一致するにはけっして説明できない。見ていないドアの音は、そのような音を聞き、同時にそのような対象が動くことを見馴れているため、ドアがやはり存続していて、それを知覚することなく開かれたのであると想定しなければ矛盾する。そしてこの想定は、最初はまったく恣意的で仮説的であったが、これらの矛盾と調停することができる唯一の想定であることによって、力と明証性を獲得する。類似した事例が提示されないような瞬間、対象の過去と現在の現れを結びつけ、経験によってそれらの特有な性質と実情に適っていると見いだしたような相互の結びつきを対象に与えるような、対象の連続した存在を想定する機会を与えないような瞬間は、人生においてほとんどない。ここで、世界に関して、実在的で持続可能なものと、それがもはや知覚に表象されていないときですら、その存在を保持するものと見なすように自然に導かれる（*ibid.*:130-131）。

ヒュームは、この、現われの整合性からの結論は、習慣（custom）から由来し過去の経験に規制されるものとして、原因と結果に関する論考と同じ性質であると見受けられるかもしれないが、吟味するとこれら両者は根本のところでは相互に大きく異なっていて、上述の推論が知性から生じていて、習慣からは間接的で迂遠な仕方では生じていることがわかるという（*ibid.*: 131）。

『人間本性論』第1巻第3部では、因果論が主要な課題となっているが、ヒュームは、原因と結果の関係について次のように説明する。ある出来事に引き続いて他の出来事が起こったことを絶えず経験したというところから、一方の対象から他方の対象への恒常的接続（constant conjunction）が見出される（*ibid.*:61）。また過去における反復から何らかの新たな推論ないし推断もなしに生じるすべてのものは習慣と呼ばれるが、この習慣という起源から現前する印象に基づいて信念が生じるという（*ibid.*:72）。信念とは、ある対象の印象が現前してくるときに、その対象に常に伴っている対象の観念を抱く際、その現前する印象に関係する、すなわち連合している生氣ある観念（*ibid.*:67）であり、『人間本性論』の付録（appendix）では、「異なった感じ（feeling）を持つ、異なった感じの仕方では抱かれている観念である」（*ibid.*:400-401）と言い換えられている。ヒュームにおいては、必然的結合は習慣に基づく結合になる。原因と結果との間の必然的結合は原因から結果へと推論する基礎である。推論の基礎は習慣的結合（accustom'd union）から生じる移行である。それゆえ、必然的結合と習慣的結合から生じる移行は同じである（*ibid.*:111）。

上の現われの整合性からの結論は、こうした習慣から由来する原因と結果に関する推論とは異なっているのは、『人間本性論』第1巻・第4部・第6節において、いかなる時も知覚なしには自我を捉えることができず、深い眠りなどによって諸々の知覚が失われるとき、自我は知覚できない (*ibid.*:165) というように、精神は、知覚以外には何も実際に存在しないのであるから、習慣がこれらの諸知覚の継起以外のものから得られることが不可能であるばかりでなく、習慣がこの規則性の度合いを超えることも不可能であることが容易に認められるからであるという (*ibid.*:131)。それゆえ、知覚におけるいかなる度合の規則性も、知覚されない何らかの対象における、より大きな度合の規則性を推論するための基礎とはなりえない。なぜならば、一つの矛盾を、すなわち精神にけっして現前しなかったものから獲得された習慣を想定することになるからである。経験的事実に関する一切の論考は習慣から由来するが、習慣は反復された知覚の結果であり得るのみで、習慣や論考を知覚以上に拡張することは、恒常的な反復や結合の直接で自然な結果でけっしてありえず、何か他の諸原理の共同から生じるに違いない、という考察に至る (*ibid.*:131-132)。

5. 恒常性と個体化の原理

ヒュームは、諸知覚の恒常性からの推論は、それらの整合性からの推論と同様に、物体の連続した存在の見解を生じさせ、この見解が、物体の別個の存在の見解に先行し、物体の別個の存在という見解の原理を生み出すという。ある印象に恒常性を観察することに慣れ、たとえば、太陽あるいは海洋の知覚が、不在あるいは消滅の後に、その最初の出現の際と同様の部分とその配列で知覚に戻ってくるのを見いだすとき、これら中断した知覚を異なったものと見なそうとはせず、それらの類似性のために、個体的に同一のものであると見なそうとする。しかしこの知覚の中断はそれらの完全な同一性とは反対で、最初の知覚は消滅し、中断の後の第二の印象を新しく創造されたものと見なすようにさせるので、一種の矛盾に陥る。その困難から逃れるために、この中断を可能な限り覆い隠し、それどころかむしろ、感知し得ない実在の存在によってこれらの中断した諸知覚が結合されていると想定することによって、中断を除去する。こうした想定、すなわち連続した存在の観念はこれらの断たれた印象の記憶と、それらが同一であると想定するようにさせる傾向 (*propensity*) から、力と活気 (*force and vivacity*) を獲得する。そして、信念の本質そのものが、想念の力と活気に存する (*ibid.*:132-133)。

この体系を正当化するために、ヒュームは四つのことが必要であるという。第一に、個体化の原理 (*principium individuationis*) すなわち同一性の原理を説明すること、第二に、途切れて中断した知覚の類似性がそれらの諸知覚に同一性を帰する理由を与えること。第三に、この錯覚を与える、途切れた諸知覚の現われを連続した存在によって結合する傾向を説明すること。第四に、この傾向から生じた想念の力と活気を説明すること (*ibid.*:133)。

個体化の原理について、まず、いかなる一つの対象の観察も同一性の観念を与えるには充分ではないことあげる。「ある対象が、それ自身 (itself) と同じである」という命題は、対象という語によって表現される観念が、それ自身という語によって意味されている観念とけっして区別されないならば、実際何も意味することはなく、この命題は主語と述語を含んでいない。命題はどのようなものであれ、この主張に主語と述語が含意されている。単一の対象は単一性の観念を伝えるが、同一性の観念を伝えない (*ibid.*:133)。

他方、対象の数多性 (multiplicity) は、対象がどれほど類似していると想定されていても、けっして同一性の観念を伝えることができない。精神は常に、一方の対象を他方の対象ではないと断言し、それらの対象を、それらの存在がまったく別個で独立した、二つ、三つ、あるいは確定した数の対象を形成するものと見なす (*ibid.*:133)。

そこで、多数性 (number) と単一性の両者が、同一性の関係と両立不可能であるので、それらのどちらでもない何かに存するほかないが、単一性と多数性との間には中間がないため、このことはまったく不可能であり、このことは存在と非存在の間に中間があり得ないのと同じであることが指摘される。一つの対象が存在すると想定された後、別の対象がまた存在すると想定すべきであるか (この場合には多数性の観念をもつ)、別の対象は存在しないと想定すべきであるか (この場合には最初の対象は単一性の状態にとどまる) のいずれかである、という (*ibid.*:133)。

この困難を除去するために、時間ないし持続 (duration) の観念に頼ることにしようとヒュームはいう。時間は継起 (succession) を含意し、その観念を何らかの変化し得ない対象に適用するとき、それは想像の虚構 (fiction) のみによるのであり、その虚構によって、変化し得ない対象が同時に存在する諸対象の変化、とりわけ諸知覚の変化に与ると想定される。この想像の虚構はほとんど普遍的に起こり、前に置かれ、何の中断ないし変容も発見することなく幾ばくかの時間の間眺められる単一の対象が、同一性の観念を与えることができるのは、この虚構による。この時間の二時点を考察するとき、それらを異なる視点に置くことができる。すなわち、それらの時点を、まったく同じ一瞬で眺めることができる。その場合、それら自体によっても、また、これら二つの異なる時点に存在するものとして一度に浮かべられるために複数化されなければならない対象によっても、多数性の観念を与える。他方、時間の継起を観念の同様の継起によって辿ることができ、最初にある瞬間を、そのとき存在する対象とともに浮かべ、その後で、対象には何の変化も中断もなしに、時間における変化を想像することができる。その場合、その対象は単一性の観念を与える。ここで単一性と多数性との間の媒体である、より適切にいうならば、取る観点に従ってそれらのどちらでもある観念がある。この観念を同一性の観念と呼ぶ。このことによって、多数性にまで進むことなく、また同時に厳密で絶対的な単一性に縛られることなく、対象という語によって意味される観念と、それ自身という語によって意味される間の相違をなす。そこで、個体化の

原理とは、想定された時間の変化を通じて、何らかの対象が変化せず、かつ中断しないということにほかならないとされる（133-134）。

スコトゥスは、『オルディナティオ』 *Ordinatio* 第2巻第3区分第1部「個体化の原理について」De principio individuationis 第4問において、個性（individuatō）、数的な同一性（unitas numeralis）、個別性（singularitas）について何を理解しているか説明している。

それは（それによって種に属しているどんな物も、数において一であると言われる）不確定な一性ではなく、（このものとしての）指定されたある特定の個性（unitas signata）である。——それゆえ先に、個体はその下位の部分へと分割されることが不可能なものであり、したがって、その不可能であることの根拠が問われなくてはならないと述べたのとちょうど同じように、個体はこの個性によって指定された或る特定の〈このもの〉であり、したがって個性一般の原因ではなく、指定された、すなわち限定された〈このもの〉としての、或る特定のこの個性が問われなくてはならないと述べる。（Scotus [1973: 426-427/1997: 250]）

また、スコトゥスは実体について次のように述べる。

現実に存在する実体は、なんらかの実体的な変化によって変えられていない場合には、〈このもの〉からこのものでなくなることはありえない。——先に述べた意味での——個性は、同一のままであり実体的に変わっていない同じ実体に、或る時にはこの個性が内属し、或る時には別の個性が内属するということはあるからである。他方、現実に存在する実体はその内にいかなる実体的変化も起こっていないし、変えられてもいない場合でさえ、矛盾なしに、或る時には或る量において在り、或る時には別の量において在る、あるいはどんな独立的な附帯性のもとにおいても在るということが生じうる。それゆえいかなる附帯性によっても、実体が形相的に、この個性によって指定された或る特定の〈この実体〉であることはない。（*ibid.*:427/250]）

しかしながらヒュームは、実体について、個々の性質の集合の観念と異なるようないかなる実体の観念ももたず、実体について語ったり論考したりする際も、これ以外のいかなるものも意味しないといひ、実体の観念は、単純観念の集合にほかならず、これらの単純観念は、想像によって統合され、一つ特定の名称が与えられているという（Hume [1739-1740/2007:16]）。印象と観念は単純と複雑に区分され、単純な印象と観念とは、いかなる区別も分離も受け入れない知覚であり、複雑な知覚は部分に区別できる。特定の色、味、香りといった、リングに統合された性質は、互いに分離できる（*ibid.*: 7-8）。そして上で取り上げた同一性について、ヒュームは、変動し、あるいは知覚上の中断がありながらもなお同一であり続けるとされる事物は、類似、接近、因果性によって結合された諸部分の継起から形成されたものにすぎないといひ、こうした継起は多様性という概念に応答するので、それに同一性を帰するのは間違いによってのみ可能となるという（*ibid.*: 166-167）。

6. 知覚の類似性と同一性、傾向、信念

第二に、途切れて中断した知覚の類似性がそれらの諸知覚に同一性を帰する理由を与えるということ、対象の現れの間にかわめて長い間隔があり、対象が同一性の本質的な性質の一つだけ、すなわち不変性しかもたないのに、なぜ諸知覚の恒常性は、それらの知覚に完全な数的同一性を帰させるのかということについて、物体の存在に関する一般大衆の意見と信念に合わせて論を進める。類似した諸知覚にそれらの中断にもかかわらず同一性を帰することについて、想像において観念を互いに連合させ、想像を一方の観念から他方の観念に移行させる観念間の関係よりも、一つの観念を別の観念に取り換えさせる、より大きな傾向をもつものはなにもない、という原則を適用しようとする。そのために、まず、完全な同一性を保持する対象を眺める際の精神の性向を調べ、次に、似た精神の性向を引き起こすことによって最初の対象と混同される別の対象を見つけようとする。思考をある対象に固定し、その対象をしばらくの間同じであり続けると想定する場合、ヒュームは、変化を時間のうちにのみ想定し、その対象の新たな像または観念を生み出すために労力を費やしたりしないという (*ibid.* : 134-135)。すなわち、ある対象を知覚し続ける場合、その対象は同一とされ、新たな像を生み出そうとすることはしないという。

では、同一である対象以外のいかなる対象が、精神を、それがその対象を考察する際に、同一である対象を考察する場合と、同じ性向に置くことができ、一つの観念から別の観念への同じく中断のない移行を引き起こすことができるのか、という問題に対し、互いに関係をもつ対象の継起が、変化しない対象を眺めることに伴うのと同様の、なめらかで中断のない想像の歩みを伴って考察されると答える。関係をもつ観念の間の移行は、なめらかで容易であるので、その移行は、精神にほとんど変化を引き起こさず、同じ作用の持続であるように見える。そして、同じ作用の持続は、同じである対象の連続した観察の結果であるので、同一性を互いに関係した対象のすべての継起に帰する (*ibid.* : 135)。

しかし、感覚に現前している像そのものが、真の物体であり、知覚の中断した像に完全な同一性を帰するにしても、現れの間隔は、同一性と反対であるように見え、これらの類似した、中断の前後の知覚を互いに異なったものと見なすように自然に導くので、この矛盾から生じる困惑が、これらの中断した現れを、一つの連続した存在という虚構によって繋ごうとする傾向を生み出す。これが、先に挙げられた第三の、この錯覚が与える、途切れた諸知覚の現れを連続した存在によって結合する傾向の説明になる (*ibid.* : 136)。

その傾向について、以下のとおり説明される。感情あるいは情念に矛盾するものは、外的対象の対立から生じるものであれ、内的原理の争いから生じるものであれ、不快感を与える。逆に、自然の諸傾向と一致し、それらの満足を外的に促進するか、それらの動きと内的に一致するものは何であれ、快感を与える。知覚の中断の場合、互いに類似する知覚についての同一性の考えとそれら知覚の現れにおける中断との間に対立があるので、精神はこの状況に

において不快になり、この不快からの救済を、一方の原理を他方の原理の犠牲にすることに求めようとする。互いに類似した知覚に沿っての思考のなめらかな移行は、それらの知覚に同一性を帰するようにさせるので、この見解を捨てることは躊躇される。それ故、知覚は、もはや中断してはならず、変化しない存在と同じく連続した存在を保持し、完全に同一するものであると想定する (*ibid.* : 136-137)

外的な諸対象は、見られ、触れられ、精神に現前するようになる。すなわち、それら諸対象は、知覚の結合した堆積、すなわち精神に対して、現在の反省と情念によって知覚の数を増すことと記憶に観念を蓄えることにおいて知覚にきわめて大きな影響を及ぼすような関係を獲得する。それゆえ、同じ連続した中断しない存在が、その存在そのものに何の真の、または本質的な変化もなしに、ある時は精神に現前し、ある時は精神から不在になることができる。感覚に対する中断した現われは、必ずしも存在における中断を含意しない。感覚的な諸対象または知覚の連続した存在の想定は、何らの矛盾を含まない。諸々の知覚の正確な類似性がそれらの知覚に同一性を帰するようにさせるとき、見かけの中断を、間隔を充たしそれらの知覚に完全な同一性を保存することができる、連続して存在するものを虚構することによって取り除くことができる (*ibid.* : 138)。

また、ヒュームはこの連続的な存在を虚構するだけでなく信じていることを指摘し、どこからその信念が生じるかを検討する。それが、上で掲げられた第四の、傾向から生じた想念の力と活気を説明することになる。知覚の中断にあっても中断の前後に知覚された事物を同一とする傾向は、中断した知覚を連続的存在によって結合する傾向をも与えるが、ここに、感覚的な対象の連続的な存在を虚構する傾向が指摘される。この傾向は、記憶のある生気ある印象から生じるので、その虚構に生気を与える。言い換えれば、物体の連続した存在を信じさせる (*ibid.* : 138)。

7. ヒュームの議論における傾向の位置づけ

以上、外的存在に関するヒュームの議論の展開を追ってみたが、知覚の中断にもかかわらず知覚の中断の前後に知覚された対象を同一と見なし、知覚されずとも対象が連続して存在するという見解には、傾向がはたらいっていることをみることができる。ケンプ・スミスは、感情や本能への理性の徹底的な従属によって人間本性の純粹に自然主義的な想念を確立することは、ヒューム哲学の決定的な要因であるという (Kemp Smith [1905/1995 :208])。また、ケンプ・スミスは、ヒュームがすべての経験の説明を、論理的であろうと実践的であろうと、自我の究極的な構成、その傾向、本能、感情、情動に求めるともいう (*ibid.* :210)。このヒューム解釈に見られるように、ヒュームの議論には傾向、信念が大きな役割を果たしている。

しかしながら、ヒュームは『人間本性論』の議論を印象と観念をもって始め、そして、そ

の印象と観念をもって、因果性、外的存在、人格、情念、道徳についての議論を考察する。そこで、傾向は印象と観念との関わりにおいてどのように説明されうるのかが問題となる。この説明がないと、傾向が人間本性のはたらきであるというだけでは、人間本性を解明したことにはならない。

ケンプ・スミスは、ヒュームが『人間知性研究』 *An Enquiry Concerning Human Understanding* 第4節第2部で、何らかの経験からの議論が、過去の未来への類似性を証明できることが不可能であると述べている箇所 (Hume [1748/2000 :32]) を取り上げ、この推論にとって十分な証拠が何ら存在していないので、その推論は何らかの論考することのない傾向の結果であるにちががなく、その傾向は習慣ないし習癖 (custom or habit) であるという (Kemp Smith [1905/1995 :216])。ケンプ・スミスはこのように述べた後で、ヒュームの『人間知性研究』 第5節第1部の一文「ある特殊な行為ないし作用の繰り返しが、いかなる論考ないし知性の過程によって促されることもなく、同じ行為ないし作用を再び行う傾向を生むときはいつでも、常にこの傾向は習慣の結果であるという」 (Hume [1748/2000 :37]) を引用するが、この箇所で述べられているのは、傾向が習慣の結果であるということ、傾向が習慣であるということではない。

『人間本性論』 第2巻・第3部・第3節「意志の影響する動機について」 *Of the influencing motives of the will* において、ヒュームは、事物から起こりうる快苦を展望するとき、その事物に対する嫌悪または傾向の情動 (emotion of aversion and propensity) を感じてこの不快または満足を与えようとするものを回避し、または抱くようになる、という (Hume [1739-1740/2007 :266])。そこで、傾向は情動、情念に関わるものと見ることができる。

ヒュームは、印象を感覚の印象と内省 (reflection) の印象に分けている (*ibid.* : 11)。感覚の印象は未知の原因から原初的に起こり、内省の印象は大部分観念から来るが、この印象は模写され、印象がなくなっても残る。これが観念と呼ばれる。その快苦の観念が再び現れてくると、欲望や恐怖などの新しい印象を生み出す。これが内省の印象と呼ばれるものである。『人間本性論』 第2巻第1部「自負と卑下について」 *Of pride and humility* 第1節「主題の区分」 *Division of the subject* ではこの感覚の印象が根源的な (original) 印象、内省の印象が二次的な (secondary) 印象に置き換えられ、この二次的な印象が情念 (passion) や情念に類似した情動 (emotion) であるとされる (*ibid.* : 181)。また、ある種の穏やかな欲求や傾向 (tendencies) があり、それは真の情念であるが、精神にほとんど情動を生み出さず、直接的な感じや感覚よりもそれらの影響によって知られる、と述べている (*ibid.* : 268)。こうした穏やかな情念と傾向が関係づけられるのではないだろうか。

先に、知覚の中断した対象を同一とする傾向について、知覚の中断の場合、互いに類似する知覚についての同一性の考えとそれら知覚の現れにおける中断との間に対立があるので、精神はこの状況において不快になり、この不快からの救済を、一方の原理を他方の原理の犠

牲にすることに求めようとする、というヒュームの論述 (*ibid.* : 136-137) を取り上げたが、このような不快が傾向に関わっていることから、ヒュームの外的存在についての議論には情念が関わっているといえる。

また、この連続した存在を信じる信念について、日常生活において、現前しない存在者の存在を推量する場合を考えてみる。その存在者は現に知覚されていないが、先ほど駅から出て家に向かっているとの報告を受けたとする。そこで、存在者は駅から家までの間に存在すると推量される。その存在は、報告を受けずに推量する場合とは違って、存在すると信じられている。すなわち、ヒュームの議論に従えば、その存在者の存在の観念をおぼろげに浮かべているのではなく、駅から家までの間にいる存在を確信している、生き生きとした観念を抱いている。日常生活のなかでは、このように存在の信念が考えられる。

引用文献

Hume, David. 1739-40/2007: Norton, David Fate; Norton, Mary J. (eds.), *A Treatise of Human Nature*, Vol. 1: Texts, *The Clarendon Edition of the Works of David Hume*, Oxford: Clarendon Press.

Hume, David. 1748/2000: Beauchamp, Tom L (ed.), *An Enquiry Concerning Human Understanding*, *The Clarendon Edition of the Works of David Hume*, Oxford: Clarendon Press.

Kemp Smith, Norman 1905/1995: "The Naturalism of Hume (I)," *Mind*, Vol. 14, No. 54, Oxford University Press, in Tweyman, Stanley (ed.), *David Hume: Critical Assessments*, Vol. 3, *Space and Time, Ontology, Mental Activity, Naturalism, Causality, External World, Personal Identity and Self*, London; New York: Routledge.

Scotus, Johannes Duns. 1973/1997: *Ioannis Duns Scoti Opera omnia*, studio et cura Commissionis Scotisticae ad fidem codicum edita, praeside Carolo Balić, t. VII, Civitas Vaticana.

『命題集註解（オルディナティオ）第2巻』、渋沢克美訳、上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成18 後期スコラ学』、平凡社

External Existence, Propensity, and Belief: Hume's Arguments of External Existence

OHSHIKA, Katsuyuki

Abstract:

Hume argues the belief in the external existence of body, the existence of body distinct from perception. His arguments are as follows.

When one body is perceived, and another body is perceived after the interruption of perception, and two bodies are very resemble, the bodies are regarded as same. But the interruption makes the two bodies are different each other. The former opinion contradicts the latter.

The propensity of human nature relieves this contradiction. Propensity feign the continued existence of body during the interruption of perception, and makes the mind regard the two bodies as same.

And this propensity causes the belief of the continued existence of body by means of the present impressions of the memory of the body before the interruption, since the remembrance of the former perception to the latter makes the belief of the continued existence of body.

Keywords: External Existense, David Hume, Interruption of Perception, Propensity, Belief.